

学びの源泉 三谷 宏治

第9号 旅に学ぶ—日本（寺社仏閣編）（前編）

#1,000年を生きること

これまでも、法隆寺や出雲大社を紹介してきた。聖徳太子一族虐殺に対する鎮魂の寺 法隆寺、大和の神との戦いに敗れた神々の流刑地 出雲大社。寺社仏閣は深い深い意味と歴史を秘めたものであった。

同時に、これらは素晴らしい日本芸術の粋でもある。その建築美、また仏像をはじめとした彫像や装飾達の美は、人の心を強く揺さぶる。

1,000年の時（とき）が峻別したものの力を、存分に理解し、味わおう。

中学時代からお寺や神社、仏像が好きで、祖父母の家のある大阪に近かった京都・奈良を中心に色々なところを訪ねた。その中でも特に「力」のあった幾つかを、今回は紹介しよう。その前に、その建築物を支える「道具」のお話を。

#「道具」の力

日本の建築様式は 15 世紀 室町時代を境に大きく変容する。力強い重厚さから繊細な様式美へと。その繊細さの極致が桂離宮に代表される書院造りだ。

この大きな変化を後押ししたのは、実は中世における、建築資源の枯渇と技術的進歩なのだ。

例えば法隆寺で使われる部材は皆、太くて厚い。大きな扉の厚みは 5cm 以上もあり、一枚で数トンともなる。

表面はヤリカンナ（穂先が曲がった槍のような形

の道具）で少しずつ削り取るように加工してある。それらが建物自体の重厚さを生んでいるわけだが、これは同時に、とてつもない資源と労力の無駄とも言える。

では何故そんな部材を使っていたのか。それは製材技術の未熟さ故と言える。

当時はまだ大きなノコギリが無く、大きな板状のものを作るには「割って削る」しかなかったのだ。それでは薄い板はとても作れない。

大ノコギリという道具が 15 世紀初頭に使われて初めて、大きな薄い板、が作れるようになった。

当時既に、大きくて丈夫で、しかもきれいに割りやすい木材（要は樹齢 1,000 年超のヒノキ）資源をあらかじめ使い果たしていたために、この新技術は一気に採用され広まった。

薄い板に仕上げた方が、扉を作るにせよ何にせよ、圧倒的に省資源である。

また更には表面を仕上げるための平鉋（かんな）が登場し、素材（特に木目）の美しさ（を見せる技術）を追究する方向が加速する。

そしてそれらが遂には桂の離宮へと繋がる。

道具の進化が建築や資源、そして美意識の在り方をも変えたのだ。

#人の力を感じること：奈良 薬師寺

さて本題だ。

とてつもなく歴史のある建築を見よう。昔ながらの営みを今も続ける場所に行ってみよう。その時間の重みと共に、何を感じられるだろう。

薬師寺東塔は、730年(天平2年)の創建以後、数々の火災や戦火を逃れ、1,300年の永きを全うしてきた薬師寺唯一の建築だ。

この33.6mの巨大かつ優美な三重塔のてっぺんを飾るのが、飛天をあしらった「水煙」。

フェノロサをして「凍れる音楽」と言わしめた至高の芸術品だ。

しかしこの塔の本質は、その下、約7mのところにある。

仏塔とは、そもそも何なのだろうか。金堂は本尊(仏像)をお祀りするところ、講堂は(本来は)仏法を説くところ、山門は人を迎え送り出すところ。では塔は。

仏塔の起源は、古代インドにおいて仏陀の遺骨(仏舍利)を納めた「ストゥーパ」にある。

その漢字表記が「卒塔婆」、その省略形が「塔」。つまり、仏塔とはお釈迦様のお墓なのだ。そしてその一番大事な仏舍利は楼閣の上、「相輪」部分の根本にある「伏鉢」にある。

故に塔の楼閣部分の内部を見ても、人が寛げるスペースなど欠片もない。塔とは仏舍利をなるべく天に近く、高いところにお祀りするための、純粹なる構築物なのだ。

それだけのために、仏舍利を高く掲げるためだけのために、これほどの美しさが天平の昔に形作られ

た。

そして東塔は爾来1,300年の間、その任をじっと果たし続けてきたのだ。

大学2年の時、これを見て、感じたものはズバリ「人の意思の力」だ。

誰が一体、自分が死んだ1,000年後のことを考えられるだろう。

30年で1世代として、自分の孫の子ども、あたりの話だ。

でも薬師寺東塔は、そう造ってある。1,000年、いや2,000年保つように造られている。

釘一本からしてそうだ。日本刀のように折り返しては叩き、何千枚もの層になっている。故に錆びても腐らない、すぐには朽ちない。

しかも、今も美しい。

どれ程の強烈な意思がこれを成し遂げたのだろうか。ただただ驚嘆するのみである。

#薬師寺にまつわる、もう二人の超人

薬師寺は今、もう2つの「人の意思の力」を見せてくれる。1967年から30年間、管長を務めた高田好胤氏と、最後の宮大工・西岡常一棟梁だ。

現在、薬師寺は彼らの手により再建され、ほぼ創建当時の形に戻っている。金堂、西塔、大講堂、中門、回廊……。

高田管長は、それを企画し、資金を集め、実現した。自らTV等にも多く出演し、タレント坊主と叩かれたが、大企業からの寄付は断り、金堂の建築費用10億円のほとんど全てを納経料1巻1,000円(今は2,000円)の般若信教の写経勸進で調達

した。

つまり数十万人を動かして、100万巻もの写経勸進を成し遂げたと言うことだ。1巻の写経に1時間は掛かるものとする、100万時間、114年分の人の祈りが詰まっている。

因みに、大講堂の再建費用は約50億円。やはりその多くを写経勸進でまかなっている。

西岡棟梁は、法隆寺付きの宮大工として有名であった。

その強烈な個性と棟梁としての卓越した力は「プロジェクトX(第25回)」を見て頂くのがよいだろう。

彼は全国から腕の良い、しかし、宮大工経験の全くない若手の大工37名を集め、見事に金堂の建築を果たした。期間中、一度も実際の作業に手を下すことなく、だ。

ただの一度だけ、喧嘩の仲裁代わりにただ^{かんぱ}鉋を掛けて見せた、とか。そして皆、その余りに薄い鉋屑の美しさに声を失い、喧嘩も忘れた、と言われている。

彼が後年、請われて若手の宮大工達に贈った言葉を、紹介しよう。

^{いかるが}鶺鴒工舎の若者につぐ。

親方^{さす}に授けられるべからず。

一意専心 親方を乗りこす工夫を切磋琢磨すべし。

これ^{たくみどう}匠道文化の心髄なり。

心して悟るべし。

ただ一人の内弟子であった小川三夫氏(西岡棟梁の下を離れて、鶺鴒工舎を設立)も言う。

当代最高の寺社でもあった法隆寺。これを造った宮大工たちの精神は、誰かに学ぶ、ということでは

なく、未知のものを造り上げる信念だと。学ぶに留まらず、新しいものに向かって、自分の能力以上のものを出し、それをやり遂げる執念だと。

彼らの考える^{たくみ}匠とは、自ら考え切り拓く者のことである。そして棟梁とはそれを「教えずして導く者」のことである。

なんと難しい・・・

皆さん、頑張ってください。

私に出来るのは、自分が学んだ「こと」や学んだ「道」を示すこと。でも一番大事なものは、そう、皆さん達が、自分で考えること。

#自分を見つめること：京都 三十三間堂

さて次の寺へ行こう。

京都駅から東へ1km足らず。歩いても行ける距離に三十三間堂はある。

今でも関西出張の行き帰りに時間があれば寄っている。

正式名称は^{れんげおういん}蓮華王院本堂。

33間、120mを射通す「通し矢」でも有名だ。(これまでの記録は一昼夜で8,132本の的中。1688年に紀伊藩の和佐大八郎が13,053本を射て達成。6.6秒に1射を24時間続けた・・・)

このお堂の中には、驚くべき仏像群が鎮座ましましている。

本尊たる千手観音坐像(湛慶晩年の作)の左右と後ろには計1001^{はしら}軀の十一面千手千眼観音立像が列ぶ。そもそも1軀だけでも、11面を持ち、40本の手が各々25種類の世界で救いを為すという観音様が千手観音である。

それが1002軀、一堂に会しているのだ。

その黄金の観音たちの上には、国宝の風神・雷神像も睨みを効かせている。

俵屋宗達^{そうだつ}の「風神雷神図」はこれを見て描かれたものだ。しかし個人的な好みで言えば、なんと言っでも二十八部衆立像^{にじゅうはちぶしゅう}(全て国宝)こそ、秀逸である。

これらは、千手観音を信ずる者を守護する役目をもつ神々^{けんぞく}なのだが、帝釈天、毘沙門天、阿修羅王、吉祥天といった聞いたことあるような名前の神もいれば、摩醯首羅天、迦楼羅王、摩和羅女という名前すら読めない神も多い。(順に、まけいしゅらおう、かるらおう、まわらによ、と読む)

それらは大抵、バラモン教(古代ヒンズー教)から取り込まれたものだ。

例えば、迦楼羅王は鳥の顔と翼を持つ異形の神だが、これこそヒンズー教3大神のヴィシュヌ神の乗り物、ガルダだ。

古代インドを支配していたバラモン教に対し、差別の否定を説いて広まりつつあった新興宗教、仏教の拡大戦略の一つがこういったことだった。

相手方の神を、どんどん自分たちの神の一部として、取り込んでしまう。相手の主張を、直接否定し対決するのではなく、自分の主張の部品(下位)と位置づける手法だ。

三十三間堂に居並ぶ、二十八部衆立像からはそんな2300年前の宗教戦争の有様を見ることも出来るだろう。

ただ、しかし、そういうことを超えて、今そこにある芸術として見事の一語に尽きる。どの1軀も破綻無く完璧な世界を表している。

お堂内部の正面に立てば、1001 軀の千手観音、風神雷神、二十八部衆と正対することになる。しか

しそこに焦りも苦しさもない。

1000年前と変わらずお香の漂うそこは、まさに静謐^{せいひつ}な時の流れる結界。時間が確かに、ゆっくり、流れていく。

お堂に足を踏み入れた瞬間、頭脳のクロック数が10分の1に落ちるのが分かる。それまで如何に視野狭く、周りが見えていなかったかが分かる。

そして自分が見える。

さて寺社仏閣編、もう少し続けよう。今回は、まず山口^{るりこうじ}の瑠璃光寺五重塔を。そして仏像の話を、東大寺^{かいたんいん}戒壇院四天王像の1軀、広目天^{こうもくてん}を中心に。

お楽しみに。

旅リスト（京都・奈良編）

- ・ 三十三間堂（千手観音、風神雷神、二十八部衆！
そしてお香漂う雰囲気）
- ・ 南禅寺（「絶景かな」の山門。大方丈の庭、狩野探
幽の襖絵。脇を流れる琵琶湖疎水工事を指揮した
のは当時 21 才の田邊朔郎）
- ・ 大徳寺（境内には公開非公開合わせて 21 の塔頭。
瑞峯院でお茶でも如何）
- ・ 東寺（新幹線からも見えますよね。国宝の塊。五
重塔は総高 57m で古塔中最高）
- ・ 光悦寺（江戸期の天才、本阿弥光悦が創った芸術
村。庭園からは鷹峯三山が借景に）
- ・ 東大寺 戒壇院（四天王像が絶品）
- ・ 唐招提寺（鑑真和上のお寺。エンタシスが美しい
金堂は 2010 年に向け解体修理中）
- ・ 薬師寺（塔の上なるひとひらの雲）
- ・ 法隆寺（最古の仏教建築、荘厳。修学旅行生が減
れば、ねえ）
- ・ 室生寺（檜皮葺 小柄な五重塔が美しい。密教美術
の宝庫）
- ・ 石舞台古墳（蘇我馬子の墓。この上で本を読むの
が夢なのだけれど）
- ・

初出：CAREERINQ. 2005/11/01